

医療の現場で挑み続ける

「医学とは先人が積み上げてきた科学の結晶です。長期にわたって臨床試験を重ね、確かに効果があると認められた治療法だけが伝承されます。そうした科学のエビデンスに基づく最新の医療を、この地域にも生かしていきたい」
過疎の村の医師と最先端の研究者。二つの顔を持つ竹澤医師は、今日も患者のために山道を走る。

市民講座を 定期開催。 高血圧の 怖さを伝える

大阪府済生会富田林病院
循環器内科部長 1992年卒

高血圧という病気は、基本的に自覚症状がない。人間ドックなどで医師に「血圧がちよっと高いですね」と指摘されても、本人は痛くもかゆくもないため、そのままの生活を続ける人が少なくない。しかし高血圧を放置すれば、のちのち、心筋梗塞や脳梗塞をはじめ



KAI Tatsuya

1966年生まれ。大阪府出身。92年、近畿大学医学部附属病院第一内科に入局。98年、同大学大学院医学研究科修了。同大医学部附属病院高血圧・老年内科講師を経て2009年から現職。医学部生に薦めたい一冊は手塚治虫「ブラック・ジャック」、座右の銘は「学問への興味を失わない」。

甲斐達也

とする、命に関わる病気を発症する可能性は確実に高まる。
「だからこそ市民の方々に、高血圧の予防策について知ってもらうことが大切なんです。地域で開業している医師と協力して、定期的に市民講座を開いています。病気になった人を治すもの

医師の務めですが、病気にならないように啓蒙するのも、市民病院の医師の大切な役割だと思っています」
そう語るのは、大阪府済生会富田林病院に勤務する甲斐達也医師。同病院は、富田林市によって建てられた公設の病院だ。病院では定期的に、市民を対象に高血圧予防の話をするほか、自分たちで企画して近隣の市町村に向き、お年寄りを集めて生活習慣病を防ぐためのアドバイスをする講座なども

続けている。

「市民病院の特徴として、大学病院よりも、患者の平均年齢が20歳近く高いことがありますね。90歳になっても元気いっぱい『あと10年は生きたい』というご老人も、診療にたくさん来られますよ」と甲斐医師はほほ笑む。
父親が歯科医師で、親戚に医師が多かったことから、幼い頃から医療を身近に感じていた。近大では軽音楽部に入り、先輩や友人たちといまも続く交

入院患者に具合を聞くのも日課だ。「皆さん、元気に100歳までは生きなアカン」とおっしゃいます(笑)。



友関係を得た。「高血圧を専門としたのも、部の先輩が当時の最先端の遺伝子組み換えマウスを使って研究していたのに興味を抱いた」からだった。

個人経営のクリニックや私立病院に比べて、より多くの患者に対して「開かれた病院」であることを市民病院は求められる。救急で運び込まれる患者にもマンパワーがゆるす限り対応する。開業医と連携しながら、地域住民の健康の「防波堤」として、日夜医療にあたるのが市民病院の医師としての務めだ。

「近大の良いところは、先生も学生も気さくで人間味のある人がたくさんいるところ。ほくも多くの先輩たちに研究やクラブ活動で面倒を見てもらいました。学生時代の交流を大切にしたいですね」

「ヒトヘルペスウイルス6B」の宿主受容体を発見

神戸大学大学院医学研究科教授
1986年卒

森 康子

2013年5月、森康子教授が率いる研究グループが世界で初めて「ヒトヘルペスウイルス6B」の感染時に働く受容体の解明に成功した。ヒトヘルペスウイルス6Bは、ほぼ人類全員が

感染するポピュラーなウイルスだ。生後6カ月〜1歳ごろに親などから唾液を通じて感染し、多くの乳幼児に高熱を伴う「突発性発疹」を引き起こす。「通常は数日で完治し予後も良いので

MORI Yasuko

和歌山県出身。県立橋本高校卒。1986年、大阪大学医学部眼科に入局。同大学大学院医学系研究科助手、助教授、(独)医薬基盤研究所チーフプロジェクトリーダーを経て2008年から現職。医学部に薦めたい一冊はシャロン・バーチュ・マグレイン「お母さん、ノーベル賞をもらおう——科学を愛した14人の素敵な生き方」、座右の銘は「日々大切に」。

